

## ● 沖 縄

### 上 地 隆 裕

本県の主要二紙上で告知されたクラシカル音楽演奏会の本数を調べたところ、2020年度シーズンに予定されたコンサートの総計は僅かに41本（繰り返しを含む）で、そのうち実際に行なわれたものが35本という例年になく少なさであった。

月別公演数の内訳は1～4月=26、5～8月=0、9～12月=15、総計=41本。その中には中止となったものが6本あり、それを総計から差し引くと、実施公演数は結局35本である。コンサートの種類で最も多かったのは、器楽（特に鍵盤、弦楽）、少ないのは声楽となった。注目されるのは、オーケストラの活動分野が低調（と言うより、同分野は、他の演奏団体や個人より演奏活動の中止を余儀なくされやすい）、だったという点。

その最も不幸な例は、琉球交響楽団（以下RSO）だ。2020年度は、その前年度発行の本年鑑で記したように、本県唯一のプロ楽団RSOが晴れて東京初公演に挑む（しかも会場は何とSuntory Hall!）記念すべき時期にあたり、TV（NHK・Eテレ「らららクラシック」全国版）やラジオ（琉球放送iラジオ）をはじめとするマスコミの応援（主要音楽専門誌および主要全国紙）もあってその前評判は高く、シーズン突入前から県民の期待はいやが上にも高まっていた。が、華々しい未来へ向かう筈のその勢いは、COVID19という未知の法定伝染病の襲来で暗転。予定した公演又はこれからの企画・立案すままならぬ、といった状況へ引きずり込まれる。

本県で「COVID19」襲来の初確認がなされたのは2月14日。以後、感染の状況は悪化の一途を辿る。（筆者は同月20日、RSOの東京公演とその後の計画等に関し、同団のMD（音楽監督）と4時間余にわたる長大なインタビューを行った。が、当時はそのウィルスの脅威については殆ど未知、又は軽視していた。）

上述した月毎のコンサート数とその悪化の様子を概ね示しているわけだが、それでも本県の演奏家達は不退転の決意を以て、個別の演奏の専門分野で闘いの最中にある。

例年に比べ激減したコンサートの中から、注目を集めたものをクロノジカルに紹介すると、まず1～4月の中では砂川涼子（Sp）と儀巧（T）の「二重唱」連続公演、作曲家でピアニストの坂本龍一と女優・吉永小百合が組んだ「平和のために～海とう詩とう音楽とう」、沖縄県立芸大オーケストラ創設30周年記念定期公演（指揮・尾高忠明）、庭野隆之チェロ・リサイタル、OMC（沖縄ミュージック・キャンプ）公演等が力演だった。

一方この時期に予定され、キャンセルまたは延期の憂き目にあった公演もある。外来公演だが、何とあの世界的チェリスト＝ヨーヨー・マが、「Bachプロジェクト」（無伴奏組曲全曲）という超ド級のプログラムを引っ提げて世界ツアーを敢行、日本では沖縄だけで公演することになっていた。（が、3月28日に組まれていた同公演はその後、11月16日に延期、更にそれから2021年の10月17日に再延期＝会場も変更＝となる。）

同様に、タイトル・ロールにイタリアからマルツィオ・ジョージを招くなど、県内オペラ界の主要メンバーとRSOが協力する形の豪華版＝ブッチェーニの「ジャンニ・スキッキ」（公演は3月28、29日、演出＝栗国淳、指揮＝園田隆一郎）も中止とな

った。

後半の9～12月では、期待のRSOによる第38回定期、五嶋龍のVn独奏会そして琉球フィル管の各種コミュニティ公演、および本県最古のアンサンブル沖縄交響楽団の第64回定期公演（独奏ピアノ＝下里豪志）等が注目された。

加えて本土に拠点を置く県出身奏者では、上述の砂川を筆頭に、TV番組や映画の演奏指導で上地さくら（チェロ）、美実（ヴァイオリン）の姉妹が活躍。また演奏現場では読響のホルン＝上里友二らの健闘が見られた。

最後に、未来を担うジュニア・オーケストラが、COVID19のため出番をほぼ封じられたことを付記しておく。